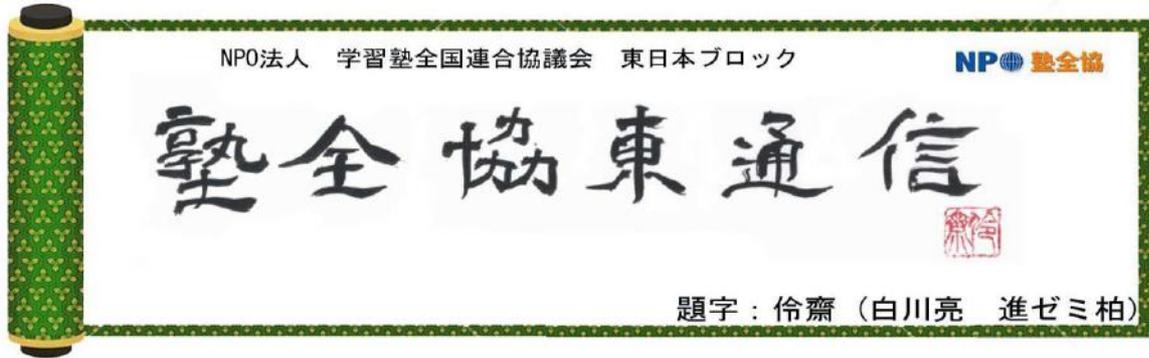


2019年12月



NPO 塾全協第 45 回全国研修大会

日時：2019年（令和元年）11月4日（月・振休） 14:00～17:40

場所：道頓堀ホテル

テーマ：浪速から日本の教育を考える

参加者数：58名

レポーター：中村基和

開会セレモニー



NPO 塾全協全国会長 沼田広慶



公益社団法人全国学習塾協会副会長 祖父江準氏

第一部 講演会

オリンピックメダリストから人材育成を学ぶ

講師：朝原宣治氏（北京オリンピック 4×100メートルリレー銀メダリスト）



《講演概要》（だ、である調にしてあります。）

今は大阪ガスの社員をやっている。基本的にはサラリーマン。オリンピック、パラリンピックの関連、或いは教科育成に係わっている。会社では地域の活力共創造チームに所属。その中に T&F がある。（* T&F とは track and field：陸上競技を意味します。）

北京オリンピックの予選から決勝までの 25 時間は生きた心地がしなかった。自分のためにメダルが取れなかったら一生言われるという心配と、そう言ってもこれだけ経験して最後は失敗する訳がないという気持ちと、ほぼ揺れ動きながら何とかやるしかないというところで臨んだ試合だった。メンバーの中で塚原は扱いにくい選手、気持ちにムラがあり、練習にも遅れるどころかこない時もあった。塚原の憧れの選手だった末次は彼に言うことを聞かせた。末次の言うことは聞く。塚原は私と末次が抜けた後チームをリードしてくれた。

1932 年のロサンゼルスオリンピックの時、日本は 4×100メートルリレーで初めて入賞した。その 60 年後バルセロナオリンピックで久しぶりに入賞、それを見て俺達がやらなければならないとバトンをつないで行った。

日本の素晴らしいところは適材適所（走順）。アメリカは、何でこの人ここに置いてんねんみたいな感じだが、日本は 1 走からきっちり考えられたオーダーで組んでいる。例えば桐生は直線でも物凄く速いが、彼みたいにカーブを上手く曲がれてバトンを渡す選手は他にいない。

（ドーハの世界陸上の時）サニブラウンは予選で桐生選手を信頼しきれなかったのでバトンをつなぐ時ゆっくり出ている。その後、ヘッドコーチと桐生が

「絶対にバトンを渡すから、思い切り出る。信じてやってくれ」ということでちょっとずつ信頼関係が

バトンをつなぐということ

- 先人の思いや技術をつなぐ(伝統)
- 切磋琢磨し向上心を持つ(普段はライバル)
- グループワークではなくチームワーク
- 適材適所(特徴を活かし、仕事を全うする)
- 個人的な感情移入ではなく共感し役割を果たす
- サブの存在 ⇄ 思いやり
- 世界と戦うためにチャレンジをする
- 地道な継続が必要
- 科学的データの活用⇒(暗黙知⇒形式知)
- 夢に向かって思いをひとつに！

信頼関係の構築

生まれてきて、決勝は綺麗に渡った。

補欠、それは日本選手の素晴らしいところで、教育なのか性格なのかかわからないが、北京の時、斎藤選手という絶好調男がいた。あの時の4人は最強と言われていたので斎藤選手が出るということはほぼ考えられない。ただ、誰かが怪我をする確率はある。彼がいないと我々も安心して速いスピードで練習することができない。逆にいつ斎藤選手と変えられるかわからないという緊張感もあって、凄く良い役割を果たす。ただ良い役割を果たすためには彼が絶好調でないといけない。しかし、そのためにはモチベーション維持が非常に難しい。自分が本番を走れる確率はかなり低いからなかなかモチベーションが上がらないが、北京の彼は私たちと同じ最高の状態で円陣を組むまで一緒にやってくれた。末次選手は自分のゼッケンの下に彼のゼッケンをつけて走っていた。ドーハの時は不調の選手の代わりに好調の選手が出場してメダルを獲った。こういうことが今の日本の強いチームを支えている。

ドーピング、日本人はほとんどいない。日本人は、スポーツは神聖なエリアで、そんなズルしてまで勝っても嬉しくないというのが私たちの考えでだが、国によっては「自分が強くなれば家族を支えられる」ということがあるのでなかなかならない。

リレーの場合データ分析が非常に綿密になっている。イチローが「何だかわからないけどヒット打たと言うのはヒットでない」と言うように、リレーでは「何かわからないけど予選通りました。気合いで頑張ります」と言うのではなかなか勝てない。皆データを理解している。

中学時代、私はハンドボールをやっていた。小学校時代野球をよく観ていたが、両親は「スポーツで食えると思うな。勉強もちゃんとやって行け」という普通の家庭の教育方針だった。中学時代、本当はサッカーをしたかったのだが、サッカー部がなかったのでハンドボール部に入った。当時の部活動は先生とのやりとりが全くない。怒鳴られながらやって来て強くなった。全国大会まで出られ、次のステージを迎えた。何で次のステージを迎えたかという、ハンドボールは燃え尽きて、先生には育てて貰えたが、コミュニケーションもない狭い狭い毎日・目指すべき大きなビジョン、例えばオリンピック、が無い中、毎日厳しい練習をしていると気持ちが疲弊してくるということで、「もう、チョット良いかな」ということで区切りをつけた。

次のステージで陸上を選んだのは自分のプロセスの中で選んでる。何よりも良かったのは、陸上ではハンドボール時代とは違って変わって指導者が何も言わなくなったことだ。私にとって

は「エッ!?全然わかんないです」という状態だった。でもその指導者はある程度基本的なことは教えてくれるが、ここから先は専門ではないということで、ほったらかしにはしなかったが、自分で考えられる環境を与えようということで、放置でなく、自分で色々考えられるような、自主性が出るような、主体性が出るようなこと、例えば専門の技術を知っている専門の指導者のところに連れて行ってくれる、或いは違う学校と共同練習をしてその結果を学んでくるとか、そういう環境を与えてくれた。私はいろんな指導者からいろんな話を聞くことができた。でも、それは上手く処置しないと、「あのコーチはこん

ドーピングによる繰り上げ銀メダル



セルフマネジメントへの第1歩

ハンドボール時代

- ・ 指示を待ち、こなす練習
- ・ 厳しい規則
- ・ 失敗への恐れ
- ・ 与えられた目標
- ・ 未来ビジョンの欠乏



自主性

陸上競技を始めて

- ・ 自ら目標設定
- ・ 自ら情報収集
- ・ 自らトライ&エラー
- ・ 責任感
- ・ セルフマネジメントの芽生え

なこと言っているのに別のコーチは全く真逆のことを行っている」、そういうことがよくあるが、自分の頭の中は固定観念しかないので、誰が知っている、誰が間違っているというよりは一回自分でやってみて行けそうだなと思ったらやる、そういう選択がここで始まる。これがやっぱり 36 歳まで続けて来た自分の陸上人生の中で、自分の選べる環境を与えてくれたというのが大きかったと思う。

自主性を持って、責任感を持って自分で試しながらやって行くこと、勝ち負けだけでなく、私が一番陸上にはまって行ったのは、体の変化というか効果を自分で得られる、与えられて来た練習で何だか分からないけど強くなったというよりは、自分で選んで、こんな風に、これは失敗だ、次これやったら凄く良くなったとか言いながら、それが徐々に記録に繋がって行く、コレ滅茶苦茶に面白いなということになって行く。

そして、今日のメインイベントです！（妻 奥野（旧姓）史子さんの写真をスクリーンに出す。場内笑い。）人間、物凄いモチベーションを持ってやらなければならないと時期がある。妻とは学生時代にひょんなことで出会い、付き合い始めて彼女に言われたのは「一緒にバルセロナオリンピック行こう。」内心絶対に無理やと思いつつながら「二人で頑張ろう」と言ったが、彼女だけ行った。メダルをソロとデュエット 2 つ持



って帰って来て、世間では大変な状態になった。私の中ではこれまであった格差が更に広がり、もう雲の上の存在になってしまった。学生時代付き合い合っていた彼女がメダリストになるというのはかなりショッキングなことだが、そこで僕はオリンピックに本当に出たいのなら次の 24 歳でなるしかない。何故かという、その次は 28 歳でもうオッサン。引退する年。結局 36 歳までやったが、そのときは次の 24 歳でオリンピックに出ないと、もう一生オリンピックなんか出られないと、ある程度覚悟を決めて行った。そういう起爆剤がないと大きな力が出ないと、それを他人から言われるというよりは自分で本気で何かしないとイケないと思わないと、なかなか人って動かないじゃないかと思う。

100 メートル 9 秒台なんて日本人には出せっこないというような「壁」を作ってはいけない。

100 メートルの時、普段国内で戦っているときと海外で戦っているときでは視界・景色が違う。そこで脳がパニックになってしまう。そこでアレッという風に力が入ったりする。

27 歳の時に怪我をしたが、それが自分を見直すきっかけになった。もがいた訳だが、本当に復活するまでに悔しい思いをしながら、これまで近寄って来てくれた人たちが離れて行き、私の中の人としての価値がだんだん目減りして行くような恐怖感。競技者というのは自分の記録と色んな評価で成り立っている、それが崩れ落ちるといのが物凄く辛い。競技者との価値というより人間としての価値が目減りしている様を感じる。私自身は怪我をしたとき、何のために陸上をやっているのかを考えて、次にやっぱり走るのが大好きだ。自分が風を切って走っているそのコースとか…競技するときは原点に戻ることが一番怪我をしたときの好転機、一番良かったことかなと思う。

現在、体育が嫌いな先生、苦手な先生に代わってコーチ達が走ったりして見せている。生徒達には自分もやってみようと思うきっかけが大切だ。

場内からの質問と朝原氏の答え

Q: サニブラウンはリレーが好きではないのでは？

A: リレーは嫌いということではない。ただ、100 メートルで活躍した後でリレーで活躍したいと思っている。

Q: オリンピックのマラソンが札幌に変わったことについてどう思うか？

A: (ツイッターで「朝原こんなこと言ってた」などとやらないでくださいと言ってから) 暑さ対策をしてきた日本の選手達にとって

はアスリートファーストではないが、海外の選手からすると「どこだって良いんじゃないか。自分たちが走りやすければ。」という事になる。



第二部 トークセッション

テーマ:「今 子どもは」事例報告。

講師 伊藤利幸氏 (元小学校教諭、障がい者相談支援センター職員)

廣田典子氏 (吹田市職員)

コーディネーター: 村田芳昭 (NPO 塾全協西日本ブロック事務局長、共学館義塾塾長)



《トークセッション概要》

(だ、である調にしてあります。詳しい書き起こしは西日本ブロックの先生にお任せします。)

伊東: ボランティア団体太陽の広場は子ども達が放課後ゲームをしないで運動場で走り回って遊ぶ場所。

村田先生は放課後は自由にすべきという意見だが、今の子は自由にさせたらゲームになる。

保育園を担当したとき新鮮な感じを受けた。小学校に比べて「命（赤ちゃん）」に近いと感じ、責任を感じた。

チャイルドラインという子どもの話を聞く専門電話がある。20名くらいの女性ボランティアと男性1人（自分）がやっている。教員時代は発信を期待されていたが、チャイルドラインを始めてから、どのように聞くか、どんな聞き方が話しやすいのか…という意味では、今、受信を一生懸命しているのかなあ…60歳を過ぎてやっと「謙虚」というものを身につけつつあるのかなと思っている。

廣田：大学を出てから大阪ガスで社会体育の仕事をしていた。その後吹田市の教育委員会から社会体育の指導をしないかとの話があり、している。介護予防の仕事もしているが、80、90を過ぎていても元気なお年寄りが沢山いて、お年寄りから元気を貰っている。

村田：チャイルドライン、このシステムは分かりにくいと思うが、もう少しおしえていただきたい。

伊東：チャイルドラインは1960年代に北欧で始まり、今日本では約70団体が実施団体として行っている。大阪は割合多くて7団体が実施している。比較的民度が高いという所では吹田市しかない。チャイルドラインは18歳までの子どもたちの専用電話。勿論相談も受けるが、雑談でも良い。

自殺についての相談電話がある。かつて中3の女の子で、母子家庭で婆ちゃん（お婆ちゃん）が学資を出しているが、勉強のことを事細かに言ってきて、「もう嫌。これから逃れるには自殺しかない。」と言って来た。

お婆ちゃんは父方のお婆ちゃん（お婆ちゃん）で、お母さんとお婆ちゃん（お婆ちゃん）の確執など色々な背景が浮かんで来るが、そんな中で一番に思ったことは、思っ（思）ってはいけ（い）ないのだが、私の電話の後で自殺しないでくれということだった。

相談の男女比は6：4で男の子の方が多い。性の悩みが一番多い。

村田：（廣田さんに）子どもでなくても相談はあるのか？

廣田：認知症の中には鬱閉（うつびん）じこもりの症状の人がいる。空気が読めなく、「こんなことを言うてはいけ（い）ない」ということが分からなくなっているか、子どもと違って（自分に）絶対そんなことはないと思（思）っている。話す人より話せない人の方が大変。しゃべらなくなったら認知症となる。人間、歩かなくなったりしゃべらなくなったら認知症になる。人間らしさをどんどん失って行くと感じる。

村田：子ども達は同じ塾の教室で機械（携帯）でしゃべっている。今、休憩時間に教室から出て来ない。

10分の休憩時間にラインの整理をしなければなら（な）ないから、休憩時間に出（出）てこ（こ）ない。

（学校、塾でスマホ持ち込み禁止のところがあるか尋ねたところ誰も手を上げない。）

伊東：スマホの流れは止められない。その中で考えなければならない。親の側から持たせるのではなく、子どもの側が持ちたいと行って来たときにルール化（ルール）する必要がある。

村田：一時よりパソコンを知らない若者（わか）が出て来た。スマホで済（済）ましている。何か気（き）になることがあるか？

廣田：英語より国語。国語力が大切。算数の問題も国語力が（な）ないために出来（出来）ないということ（こと）を聞いたことがある。スマホでなく、「しゃべ（しゃべ）る」こと（こと）で、家族（か）でも友（とも）だち（ち）でも話（話）すこと（こと）…「おはよう（おはよう）」も最近（さい）言（い）わない（わ）ない…しゃべ（しゃべ）ることが大切（たいせつ）である。

村田：面（めん）と向（む）かって話（わ）す機（き）会（かい）が子（こ）ども（ども）たち（たち）に少（すく）なくな（な）っている。

伊東：電話（でんわ）で50分（ぶん）無（む）言（ごん）という（い）うのもあ（あ）った。また聞（き）きづ（づ）ら（ら）か（か）った（た）とき（き）に聞（き）き返（か）せる（せる）子（こ）か、返（か）せ（せ）ない（ない）子（こ）か…神（しん）経（けい）を（を）使（つか）い（い）な（な）が（が）ら（ら）対（たい）応（おう）し（し）て（て）い（い）る（る）。

大会宣言

国連によれば、世界の人口は、2050年には現在の72億人から98億人へと増加することが予想されています。それに伴い、現在以上の食糧問題、エネルギー問題、医療問題、宗教問題などに見舞われる事が心配されます。翻って、日本国内では、ますます進む少子高齢化による生産年齢人口の減少、中山間部における地域社会の崩壊、国際競争力の低下などの直面している喫緊の課題もあります。

我々は、次世代を担う子どもたちが新しい技術や社会システムを構築して、今後予想されるこれらの危機を乗り越えていくことを期待しますが、まずは、子どもたちを預かる我々自身が、日々の学習指導のみならず、現在子どもたちを取り巻く諸問題についての解決策を探る取り組みと研修を重ね、次代の人材育成に寄与していかなければなりません。

そこには、狭く教育業界の中だけに留まらず、産業界・スポーツの世界などにも見分を広げ、今、混迷する世情やますます進む情報化、多様化する価値観の中にさらされている子どもたちのために、直接、子どもたちと対峙する数少ない大人として、彼らの道標（みちしるべ）となるべく、研鑽を積んでいく必要があります。

NPO 塾全協は発足以来、江戸時代の私塾を源流として発展してきた私塾の長い歴史の中で、「学力の下支え」とその実践に裏付けられた具体的な貢献を果実として活動してきました。昭和から始まり、平成、そして令和へと、やがて半世紀を迎える活動では、どの時代でも「研修の塾全協」を標榜してきましたが、その活動の中身は、いずれも民間教育の立場から人材づくりを通してこの国の発展、ひいては世界の平和に寄与していけることを目的としたものでした。今後の時代も引き続き「教育の下支え」のもとに、自己研鑽とNPO 塾全協としての活動を重ねてまいります。

本日の研修大会をその一助として決意を新たに、大会宣言といたします。

2019年11月4日

NPO 塾全協 第45回全国研修大会 in 大阪

実行委員長 杉山 信良



大会宣言を読み上げる杉山信良実行委員長



閉会の挨拶をする伊藤潤司 NPO 塾全協
東日本ブロック理事長

懇親会



山下憲男 NPO 塾全協西日本ブロック理事長の挨拶



後多田純寿 NPO 塾全協前会長の音頭で乾杯



私事ですが、父私息子と親子3代で中学時代に陸上競技をやっていました。息子はそれで高校に入ることが出来ました。3人とも中長距離ですが、短距離や走り幅跳びにも興味があるので、こんな事を言っ
てはいけないのでしょうか、塾教育との関連などはいいかからとにかく朝原氏の話を知りたいとワクワク
していました。さて、塾教育との関連はあったかというところがありました。受け身ではなく主体性を持っ
て自ら考えて練習すること。強制ではなく強いモチベーションをもって事に臨むことなど難しいこと
ですが、これが理想だとあらためて感じました。

第2部ではスマホの問題が多く取り扱われました。スマホが普及するなれば止められないにせよ、
それに依存せず「話す」ことの大切さを再確認しました。

杉山先生をはじめ西日本ブロックのスタッフの先生方、ご苦労様でした。

NP0 塾全協全国事務局長・東日本ブロック広報局長 中村基和

NPO 塾全協東日本ブロック 今後の主な予定(2019年度)

今後の主なイベント

12月 8日(日) 私塾ネット+塾全協 合同研修会

会場 スタディプラス(株) セミナースペース

12月18日(木) 教育情報展 柏商工会館

編集 NPO塾全協東日本ブロック 事務局長 中山和行

〒350-0322 埼玉県比企郡鳩山町今宿229番地

TEL 049-296-1111 FAX 049-296-1111 E-mail gyqbt650@ybb.ne.jp

NPO塾全協東日本ブロックHP <http://www.jzk-east.com>